（2019年9月末まで赤れんが庁舎内にあった文書館展示室の解説です。）

北海道立文書館展示資料解説

東西蝦夷山川地理取調図　～はじめての北海道詳細図～

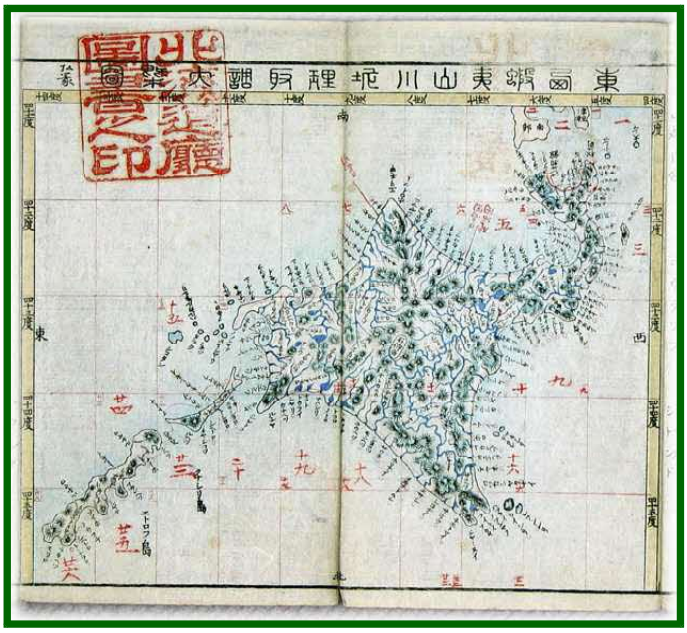
『東西蝦夷山川地理取調図』は十数年におよぶ蝦夷地探検の上、安政6年（1859）に松浦武四郎が完成させた北海道の地図です。北海道図は、文政9年（1826）に伊能忠敬、間宮林蔵などの測量をもとに幕府天文方高橋景保が作製した「大日本沿海輿地全図」の蝦夷全図など既に正確な海岸線が描かれたものがありました。これに内陸部の山脈、河川、湖沼を記入したものが『東西蝦夷山川地理取調図』です。

この地図は1枚が約38×50cmの大きさの和紙に木版多色刷りされ、26枚で北海道全体をあらわしています。そのほかに「首」として凡例、大概図、案内人名、「尾」として主要地をあげ、その地名、範囲、人口、山川、名所などを記したものがあり、全部で28枚で1セットになっています。地図には地名以外に「運上屋」「会所」「泊リ宿番屋」「人家有ル処」「舟澗」などが朱印で、「道路」が朱線で示されています。

▲地図を折りたたんだ状態

『東西蝦夷山川地理取調図　四　緯四十二度 経五度　従臼尻村領砂原鷲ノ木　ヤムクシナイアブタウス到モロラン領ワスベツ　併西部乙部村辺　シマコマキスツ、ヲタスツイソヤ』（旧記2273）

真ん中が内浦湾、下方に駒ヶ岳と大沼（ニクリハケ、ホントウアト）、真ん中右端が室蘭（モロラン、エトモ、大コクシマ）、やや右上が洞爺湖（近くにはウス、善光寺の名が見える）、その左上に後方羊蹄（シリベシ）山、左上端が寿都（ヲタシュツとある所、運上屋の印・や人家有ル処の印○が見える）。



◀『東西蝦夷山川地理取調図　首』(旧記2269)に描かれた大概図。26枚の地図をつなぎ合わせるとこのような北海道図ができあがります。現在の地図とは違い、北が下になっています。枡目ごとに記された漢数字は地図の番号。

探検家松浦武四郎の著作

松浦武四郎は数多くの蝦夷地探検の紀行文を残しており、そこには地名や地形、地勢、またアイヌの様子についても詳しく記しています。

（『久摺日誌』旧記1157／『夕張日誌』旧記1589／『知床日誌』旧記1622／『十勝日誌』旧記191　下段の挿絵図は『久摺日誌』から）

『東西蝦夷山川地理取調図』や松浦武四郎の日誌の木版本については北海道立文書館の閲覧室で公開していますので、是非手にとってご覧になってください。